



洋書輸入協会会報

Vol. 30 No. 1 (通巻344号) 1996年1月

謹んで新春の

お慶びを申し上げます

1996年1月1日



理事長 海老原 熊雄

1月に阪神地方を襲った大災害、3月の東京地下鉄で起きたサリン事件、加えて止まるところを知らず続発する金融不祥事に、“日本はどうした？”と世界の耳目を集めた1995年も、あわただしく過ぎ去って行きました。戦後50年、新生日本にとって昨年は厄年だったようです。

この50年のしめくりに当たって、昨年はわが洋書業界にとっても大変な一年でした。超円高に触発された内外価格差批判に晒されたばかりか、不正競争の疑いまでかけられるという“苦渋の年”でありました。

さて、内外の出版界を概観してみますと、めざましい電子メディア商品の急成長とインターネットの進展振りが

がクローズアップされます。フランクフルトを始めとする、世界各地のブックフェアでは電子メディア専用フロアが特設されたり、印刷出版物とは分けてブースを構えるなど、従来のわき役が主役に取り替わって代わる気配さへ感じられます。また、Publishers Weeklyなどの業界誌には毎号どこかにCD-ROMやインターネット関連の記事が掲載され、その動向から一瞬たりとも目を離せません。分野や規模の大小を問わず、多くの出版社が意欲的にその開発に取り組んでいる様が見て取れます。

この電子メディア商品の急成長とインターネットの広がりによって、“出版”という行為がこれまでの印刷物

目次

新年の挨拶 理事長 海老原熊雄	1	うちの会社	3	原稿を募ります	4
理事会報告	2	文化厚生委員会だより		洋書輸入協会史(103)	5
海外ニュース	2	72会ゴルフコンペ	3	出版文化史逍遙(1)	7
		フォーティープ忘年合宿報告	4	広告	8

という媒体に加え、インターネット上に情報を載せることをも指すようになって来つつあります。その情報を受信すること即ち“読書”という図式が成り立つ一方、我々の従来の商い＝本の流通＝が成り立たなくなるのではないかという懸念が生まれます。またホームページを開設し、“独特の価格”を華々しくアピールして売り込みを始めた【BOOKSHOP】が、わが国にも幾つか出現しています。早く、安く、というすべての商品に通じるうたい文句が一部の顧客に受けているようです。今年はこれが当協会にとって大きなテーマになりましょう。

明るいニュースとして、昨年暮に10月の景気動向指数

が50%を超えたという発表がありました。ほぼ3年半振りにデパートの売上が前年同月を上回りました。年明けには平均株価が2万円を超えたという報道の背景として、景気の回復も本物かと仄かな期待を抱かせます。昔に戻るという安易な期待は持てないとしても、努力をすれば相応の手応えがあることになりましょう。百戦錬磨の会員の皆様には、今年もしっかりと地に足のついた商いを続けられることを期待します。更に、昨年協会を退かれた会員の方々も再び仲間に加わって、わが国の文化振興を支える、活気のある洋書業界への復活を祈念して年頭のご挨拶といたします。

理事会報告

12月25日(月)

(一)11月分収支報告

12月15日(金)開催の総務委員会で審議の11月分収支について総務委員長の報告を承認した。

(二)委員会報告

イ. 総務委員会

会員資格変更(賛助会員→正会員)の推薦文(案)を、理事会にて審議、一部訂正のうえ承認した。

ロ. 文化厚生委員会

1996年賀詞交換会の当日の手順について委員会を開催、各委員の具体的役割が紹介された。

ハ. 事業委員会

2月8日より開催の東京国際ブックフェアで行う洋書バーゲンセールは12社前後の参加が予定されている。昨年以上の盛況が予測される。

(三)公正取引委員会関係

既に理事会社を中心に10数名の会員が同委員会の聞き取り調査を受けたが、18日と26日に事務局長の参考聴取があり、事務局及び各委員会の業務内容や役割分担、協会規約の具体的説明等について質問があった旨事務局長より報告があった。

海外ニュース

米国マルチメディア市場の発展

Windows '95 発売当時のフィーバー、インターネットの拡大・普及と、欧米諸国を中心としたマルチメディア・ブームには目をみはるものがある。経済界においては、マルチメディアをビジネスにいち早く取り入れようとする動きが盛んである。書籍出版産業でも、コンピュータ関連の書籍が相次いで出版され、電子出版物も急増している。印刷物としての書籍は姿を消し、電子商品がそれに取って替わる日も近いのではないかとの声があちこちで聞こえる。

そのマルチメディア産業で指導的役割を担っているのがマイクロソフト社である。最近では国内のパソコン・ユーザー対象にマルチメディアタイトル出版に力を入れている。なかでも注目すべきは、シアトル美術館所蔵の1,000点にも及ぶ作品に対して、電子出版の権利を獲得したことであろう。同社はこの他にもスミソニアン博物館やロンドン・ナショナル・ギャラリーなどと交渉中の他、インターネットを利用した独自のネットワーク作りにも携わっている。マイクロソフト社のような革新性を備えた企業が今後のマルチメディア市場の将来を左右するとみる専門家もいる。

米国のマルチメディア市場はまだ発展途上の段階にある。新聞、書籍、雑誌を含む出版産業の売上100億ドルに対し、パソコン産業は10億ドルと10分の1に過ぎない。市場の発展性に対して懐疑的な見方もあるが、将来の動向が注目される。現にインターネットの普及に伴い、

2,000以上の卸業者がネットに仮想店舗を開いており、1994年時点で100万ドル以上の売上高を記録した企業もある。こうしたネット上の取引が書籍の物流を変えつつ

ある。出版・書店業界の構造・形態は、マルチメディア市場の拡大・発展により変革を余儀無くされるであろう。

—Bookseller 11月27日号抜粋—

うちの会社

株式会社 ミロブックサービス

小社は、広告の製作をするデザイン事務所やその業界に関係するカメラマン、設計事務所などを顧客としております。営業マンと車を使ったダイレクトセールスを行っております。

1968年創立当時の日本では、まだまだ海外の本は珍重されておりました。持って行けば買ってもらえると云う時代で、まさに売手市場でありました。小社も高度経済成長と共に成長してきました。

時代が変わって、ここ数年ではどうでしょう。今では海外に気軽に行けるようになり、街角には洋書が目立ちだし、それと共に顧客の感性にも磨きがかかってきました。バブルがはじけ、日本全体の景気が落ち込み

ました。企業は交際費、交通費、そして広告費までカットを始めました。広告が世の中から少なくなってゆき、デザイン事務所はいよいよ仕事が少なくなって行きました。当然生き残りをかける事務所としては、資料の買い控えをする様になってしまいました。

今やコンピューターが進み、時代は急速に変化しております。もはや小社を設立した時代とは何もかもが違っていて、ただ同じなのは洋書売っているという事実だけなのです。まさに今、小社にとって一大転機を迎えるべきと毎日を少ない知恵を絞り出しております。

(堀井 康)

文化厚生委員会だより

第78回 72会ゴルフコンペ

柏ゴルフクラブ 1995年12月14日(木)

天気は下り坂、午後からは雨になるかも知れないという予報もありましたが、当日は早朝こそ少し雲があり、それも、すぐに無風快晴で暖かい絶好の日和となりました。コースは名門柏GC。フェアウェイはフラット乍ら、松林に入れたら、キンコンカーン即ち2打3打を覚悟せねばならぬ手強い林間コース。12月の多忙の時を忘れて、20名の参加者が力と技を競いました。

前回の小金井CCでは、初参加で迷惑をかけたとは云い乍ら、極東書店の池田さん、2回目の参加で見事なリカバリー、優勝されました。2位は林にも入れたが、アイアンショットが良かった、アプローチも同組のベーカー後藤さんを見習い参考にされたと云う紀伊國屋の高井さん。ドラコン、ニアピンも併せて獲られ実力通りの入賞となりました。3位には、「まだまだ、なめたらあかん」と許りの日質中林さん。若手飛ばし屋を圧倒して堂々ドラコン2本をも併せ獲得され、拍手喝采をあげられました。入賞された方々の軽妙なスピーチ、初参加の

ロングマンのポール・ラストさんのスピーチ等で盛り上がり一層和やかなパーティとなりました。ゲーテ書房村山さんの「72会ゴルフコンペが長く続くことを願っています」とのメの挨拶でお開きとなりました。幹事の鶴さん、和田さん御苦労様でした。

成績表		G	HC	NET
優勝	池田篤治(極東書店)	96	29	67
2位	高井省吉(紀伊國屋)	89	16	73
3位	中林三十三(日 質)	90	10	80
四位	斉藤純生(U P S)	84	4	80
5位	竹村政彦(丸善OB)	93	12	81
ベストグロス 斉藤純生(U P S)		G84		
ドラコン 中林三十三(日 質)		中林三十三(日 質)		
		高井省吉(紀伊國屋) 斉藤純生(U P S)		
ニアピン 高井省吉(紀伊國屋)		斉藤純生(U P S)		
		竹村政彦(丸善OB)		

(H.N. 記)

フォーティラブ (JBIA テニス同好会) 忘年合宿報告

昨年の11月25日(土)～26日(日)に、紀伊國屋書店さんのご好意で、社員用の施設である山中荘を利用させて頂き、合宿テニスを楽しみながらの忘年会を開催した。参加は12名、殆ど全員がレギュラー・メンバーと言ってもよい気心の知れた仲間内の集まりで、金曜の夜から三々五々現地に到着した。晩秋の山中湖畔には冬の訪れも早く、寒風にさらされながらのゲームはまた楽しさ(?)も一入(ひとしお)である。紺碧の空に聳える富士とはいかないまでも、まずまずの天気で、富士の裾野で納会が行えるなどとは最高の幸せであった。昼はテニス、夜は温泉のコースを考えるようになったベテラン組、たとえば聞こえはいいが、いよいよ中高年グループというのが本音である。最近の開催地の中で前回の野田が良かったというのが専らの意見であった。しかし、一度コートにたてば皆若々しい振る舞い、大差を感じさせないが、それでも一人医学書院 MYW の正路君が新メンバーとして2、3回にして、フォーティラブの精鋭の名をはしりまに活躍していたのは特記に値する。と言っても今回は参加できなかった筆者なので、報告があったと言うべきである。いずれ拝見させてもらえる筈なので期待している。

報告を纏めながら、テニスが人生を通しての大きな楽しみになるであろうと思っていた頃がふつふつと蘇ってくる。8月の炎天下のクラブでは、昼は皆ビールを求めてコートから消えてしまう。シメタ! とばかりシングルス始める。

5、6ゲーム進んだ頃には、脳天がくらくらしてくる。自分からギブアップはできない。朦朧としながらも試合を続行して何とか終わらせる。その相手をしてくれた友人も今は昔と教壇に立っていて、テニスはほとんど辞めてしまったようである。筆者も気持ちだけは未だ30才である。もう一度思い切ってボールを打ちたい。

今回の参加は8社、12名であった。華麗なテニスをする洋販の鈴木さんも、あのバイクで寒さをものともせず馳せ参じたとのこと、筆者も年令に甘えていたのではないとつくづく考えさせられている。一つだけ難を付けさせてもらえば、今回のような合宿はあくまでも冬季合宿で、忘年会は近間でもっと大勢が気楽に参加できるようにできたら最高の賛辞を呈したいと思った。

次回はコートでお会いするのを楽しみに、1995年度納会の報告とします。(RA記)



原稿を募ります

会報のマンネリ化を危惧する声が聞えます。新しい風を吹きこみ、その内容をより多彩なものとするためにも、会員の皆さまの寄稿が待たれます。

◎題材は問いません。「本」に関すること、洋書の業務のこと、同業との交流のこと、等々、なんでも結構です。

◎随筆・随想なども歓迎します。

◎一篇1600字以内としますが、長文のものでも採用して何回かに分けて掲載することがあります。

◇投稿の掲載にあたって、編集のため削ったり直したりすることがあります。

洋書輸入協会史 (103)

洋書輸入協会顧問 相 良 廣 明

122 風俗問題 (前号よりの続き)

122.2 ホンリ्यू・コーポレーションの件

(1) ホンリ्यूに東京地裁の判決出る

昭和41 (1966) 年12月14日付読売新聞に、洋書輸入協会会員であるホンリ्यू (代表者居村方治氏) に関して、次のような記事が掲載された。

洋書裁判に有罪判決 “英文でもワイセツ文書”

東京地裁

読者層の限られた英文の小説でも“ワイセツ文書”に当るかどうかという異色の判断がかけられたわが国はじめての“洋書裁判”判決公判が14日午前10時から東京地裁刑事9部で開かれ、石田弘裁判長は「英文であるため、読者層は限られるが、英語の普及度からみて、その公然性を否定出来ない。いはゆる“春本”である限り、無罪とはいえず、英文でもワイセツ文書になりうる」として、問題の洋書を買った居村方治被告(39)に罰金3万円、執行猶予2年(求刑罰金5万円)の判決を言い渡した。

この判決によってたとえ原書でも、内容によってはワイセツとして取り締まる道が開かれたわけで、読書界に波紋を呼びそうだ。

ワイセツ文書はん布罪に問われた居村被告の基礎事実は、①34年5月頃中央区銀座の小売店に露骨な性描写を内容とした「ある少女の冒険」など7種類の英文小説194冊を販売の目的で持ち込み、②35年7月から10月まで港区青山の営業所などで同様の英文小説(ドリー・モートンの記憶)260冊を持っていた——というもの。

居村被告は、さる36年、警視庁に摘発され、大森簡裁で罰金5万円の処分を受けたが、正式裁判に持ち込み、さる37年1月から東京地裁で審理が始まった。

検察側は「刑法175条のワイセツ文書は日本語に限らない。英語人口のふえたことなどから原書だからといってみのがせない」と主張、先月17日、同被告に罰金5万円を求刑した。(以上)

この事件はホンリ्यूの卸先が協会の会員外であり、ホンリ्यूが摘発されたことも、起訴されたことも理事会の方へ伝わってきていない。知らぬが仏とは良く言ったもので、この年の1月31日付のJBIA No. 223では、「桃色出版物の輸入自戒について」と題する通知文の中

で、東京税関から「最近東京都内でいかがわしい種類の洋書を販売しているとの報告があったので、本会々員にも注意するようにとの指示」を受けたが、「本会々員に限り絶対かかることは無い旨の返事をした」との記事がある(JBIA 会報 Vol. 29 No. 12、協会史 No. 102所載、122章風俗問題、122・1 JBIA 発の自戒のすすめ、参照)。このように大見得を切ったことが、協会理事会が何も知らなかった証左であろう。

協会理事会としては、早速昭和41 (1966) 年12月16日の理事会でこの件を審議し、先ずホンリ्यूの居村氏に事情を聞き、その上で対策を考えることとした。しかし翌昭和42 (1967) 年は初頭から JEC (後述) の問題、協会事務所の開設、組織の改革などの諸問題に忙殺され、延引しているうちに、ホンリ्यूに次の問題が起った。

(2) ホンリ्यूまたまた立入り調査を受ける

昭和42 (1967) 年8月15日の理事会にホンリ्यूの居村社長の出席を求め、つい最近に起こった件を含めての説明を願った。その説明は概要次の通り。

① 先々月の6月14日に警視庁より20人位が来て立入調査をした。問題はアクトという雑誌が法規に触れるとのこと。これは1966年と67年にそれぞれ200冊位入荷したもの。その他にも倉庫から10種類位摘発された。(現物持参)

② 居村氏は翌日検事拘留された。間もなく釈放されたが、9月には書類が出来上がるので、それから裁判が始まるであろう。

③ 摘発を受けたものはいずれも芸術写真であり、居村氏自身としては決して風俗壊乱とは思わないし、日本の若い人達には当然芸術と受け取られると信じている。

④ あまり人騒がせなことはやりたくない。書籍の方は8年前に摘発を受けて以来一度も問題を起こしていない。今後も問題になるものはやらないつもりである。

上記の居村氏の説明に対し、居村氏退去の後に所見を述べ合ったが、芸術性については当然のことながら見解を統一出来ず、居村氏の主観を支持する意見は出て来なかった。寧ろ、①協会としては、協会の信用上の観点から判断せざるを得ないであろう、②将来の問題はさておいて現時点では、現在の担当官庁の判断に従うこ

とが妥当であろう、③輸出の際も相手国の実情に応じてチェックする。輸入に際してもチェックするのは当然であろう、というような意見が主流であり、なお検討を続行することとした。

(3) その後のホンリゅう

ホンリゅうの件は、その後ホンリゅう自身から退会届が提出され、協会としては決着がついたが、昭和45(1970)年2月10日の理事会で、次のような報告があった。

① ホンリゅう・コーポレーションは1月末に閉店した由。

② 居村氏は、台東区に居村貿易株式会社を設立、玩具を扱っているとの話。

以上であるが、風俗問題はそれに対応する人の主観によって判断が異なり、殊に信念を持って行動する人には、JBIAとしては別個の途を歩んで貰う他に方法がないのではないと思われる。また風俗問題には、担当官庁に税関と警察の両方があり、業界でも輸入元、卸元、小売店ではそれぞれ立場が異なり、なかなか難しい問題を抱えている。一朝一夕には解決しない問題である。

123 JECの倒産

123.1 倒産の噂流れる

昭和40(1965)年9月27日の理事会で、USACOに勤めていた馬場雅久氏の退社の挨拶があり、間もなくJECという会社に勤めた旨の挨拶状が届いたことは前述した(JBIA会報 Vol. 29 No. 11, 1995年11月号所載、119章の7、「業界消息」の(3)参照)。

馬場氏はJECに勤務するや否や洋雑誌の受注活動を開始し、それも今までの得意先のコネを辿って相当強引に注文を集め、前金を取り、或程度の成果を挙げていた。ところが昭和41(1966)年の半ばを過ぎると、JECに注文した雑誌が入らないという噂が流れ始めた。今までの馬場氏との付き合いから注文を廻し、前金を払った所は、雑誌が入らないために、発注担当者が大変困っているという話が伝わるようになった。

昭和42年(1967)年1月10日の理事会では、JECが既に風前の灯火であると報告されている。JBIAの各社にとっては、得意先には共通のものが多し、自社の持ち分を強引に新規のJECに廻されたところもあって、決して心穏やかで無いとはいっても、現実には永年の得意先が窮地に陥っているのを放置する訳にはいかず、各社それぞれの立場から対処していたところであった。

123.2 馬場氏のお詫びと釈明

JECは、昭和42(1967)年1月20日に倒産した。2月3日の理事会で、馬場氏よりいずれ理事会に出席させて貰ってお詫びと釈明をしたいとの申し入れが取り次がれ、これを諒承、それは2月8日の理事会で実現した。

馬場氏の説明によると、①JECは社長が貝塚氏が馬場氏は代表権のない専務取締役であった。社長は資金面を担当し、馬場氏は営業責任を負っていたが、経営の異常に気が付いたのは昨年の10月31日のことで、この日に社長を追及したところ、3,000万円の負債が生じているとのこと。うち金融関係の負債が1,000万円の由で、その場では、1,000万円の融資を受けこの負債を解決することで話がついたが、12月15日まで待ってもそれが実現しない。そこで自分で解決するつもりで動き出したところ、大口発注者3社よりこのJECの窮状を知って三洋出版貿易の鈴木社長に働きかけがあり、鈴木氏に御援助を願うことになった。その他にも甚だ好意的な協力を頂いている業者もあり、心から感謝している。

②JEC発足当初の貝塚氏の出資は350万円、それが倒産時には5,000万円を越す負債となっており、しかも海外の仕入先の大部分は支払いが済んでいない。自分としては何とも不可解な現象である。

③馬場氏自身は、これだけ諸方面に迷惑をかけたので、今後洋書業界で生きていくつもりはない。三洋の鈴木氏からもこんこんと言われている。

次いで三洋の鈴木社長からは、JECの貝塚氏が、得意先への負債が他の業者に肩替りされたところで、JECの再建を計っているという話があったので、鈴木氏自身が貝塚氏を呼んでその意図をやめさせた由の追加説明があった。

また他の理事からは、得意先から受けた雑誌や継続もののうち未入荷のものについては、馬場氏よりはっきりと辞退の文書を出しておいて貰いたいとの要求があり、馬場氏これを諒承。

以上のお詫びと釈明があったが、馬場氏が理事会に出席して謝罪したことは立派であるにしても、すべての責任を貝塚氏にかぶせ、途中経過に不明な部分があるところなど、釈然としない点も多い。ともかく、協会員外の会社のしでかしたことから、得意先と会員に大きな迷惑をかけた事件であった。

(続く)

英語辞書の歴史—ジョンソン以前—〔1〕

丸善・本の図書館 鈴木 陽 二

◆新しい連載を始めるに当たって

「会報委員会」のご好意により、新しい連載を始めることになった。「東京の坂と橋と文明開化」で可能な限り出版文化に言及するよう心がけたが、この新しいシリーズでは、その出版文化を巡るテーマを幅広く紹介していく計画である。「西から東から」は、いうまでもなく欧米と日本を対象としていることを意味している。しかし、「洋書輸入協会」会報という本誌の性格から考えて、できるだけ洋書に関連した事項を取り上げていくことにしたい。ご高評をいただければありがたい。

◆英語辞書の誕生まで

シリーズの第1回目として何をテーマにするかをずいぶん迷ったが、辞書を取り上げることにした。辞書は学問の基本的なツールであることはだれでも異論がないと思うし、また、洋書業界にとってきわめて重要な商品であることを考え、まずは順当な選択ではないかと判断したものである。

英語辞書は Robert Cawdrey の “A Table Alphabetical” (1604) をもって始まるといわれている。しかし「辞書」そのものの起源を尋ねるとすれば、それからはるか以前にさかのぼり、厳密には最初の辞書を特定することはできない。古い例を挙げれば、古代メソポタミアから紀元前7世紀のアカド語のリストが発見されており、また紀元1～2世紀ごろにはギリシャ語のレキシコンが沢山編纂されたようである。ヨーロッパ中世はラテン語が主要語であったが、初期にはラテン語の難しい単語の注解を写本の行間に付ける「行間注解」が行われており、それを拾いだして集め適当に並べた注解集が出回るようになった。10世紀にはややアルファベット順の配列の形をとった “The Lexicon of Suidas” がビザンティンで発行されたという。

このように、辞書の原型は難解な単語の解説から始まったものである。オックスフォードやウェブスターの大辞典によると「説明を要する難しい言葉」という意味のギリシャ語やラテン語の “glossa” や “glossarium”

などから転化し、それらが英語の “glossary” 『用語集』に発展したことが記されている。

英国で活版印刷を始めたのは William Caxton (1422頃-91) で、彼は1471-1472年にケルンで印刷術を学んだのち、イギリスに戻って1476年にウェストミンスター聖堂の構内に印刷所を設けて活版印刷を開始した。最初に辞書の印刷を手がけたのは1480年で、旅行者のための仏英単語集であった。これはタイトル・ページがなく26葉のものであった。カクストンの弟子の Richard Pynson によって、1496年には有名な文法学者 John Stanbridge (1463-1510) が編纂した羅英単語集 “Vocabula Magistri Stanbrigii” が印刷され、次いでノーフォークのドミニコ会修道士 Galfridus Grammaticus によって1440年ごろに編纂されたと考えられている “Promptorius puerorum” (Storehouse for Children) が、同じくピンソンにより1499年に印刷された。この辞書は後年 “Promptorium Parvulorum siue Clericorum” (Storehouse for Children or Clerics) (子供と下級聖職者のための言葉の宝庫) として知られるようになった。英羅辞書の系統で、Sir T. Elyot による羅英辞典 “The Dictionary of Syr Thomas Elyot Knyght” が1539年に英国で刊行されたが、書名に “dictionary” という英語が始めて使われた辞書であった。文法解説や語法を記述しラテン語文献から用例をとるなど、ルネサンス期の羅英辞書の指針を示した辞典であったという(寺沢芳雄編『英語史総合年表』)。次いで Thomas Cooper が1,600ページのアルファベット配列で、古典ラテン語作家の用例の多い “Thesaurus Linguae Romanae et Britannicae” (1565) を編纂した。彼は貧しい出自ながら司教になったが、辞書の編纂に熱中して家を省みなかったのを不満とした妻が、半分程仕上った原稿を焼却してしまい、やり直して完成したという逸話がある。1587年にはケンブリッジ大学最初の印刷担当者であった Thomas Thomas の編纂した羅英辞書 “Dictionarium Linguae Latinae et Anglicanae” (1587) が発行されたが、コードリーはこの辞書を大いに参照して初の英語辞書を制作した。



有機化合物大辞典

第6版/全9巻



Dictionary of Organic Compounds

6th Edition, 9 Volumes

Ed. by J. Buckingham and F. Macdonald



DOC6の情報は以下の点においてユニークです。

過去100年間に何百万もの有機化合物が合成されてきました。例えばChemical Abstractsには1,300万以上の化合物が登録されています。発表された論文に記載された化合物が重要であろうと論文に発表された化合物は何でも登録されています。しかしながら、その中のどれだけの化合物が重要なのでしょうか？ 実際によく利用されるのは5%以下ともいわれています。

DOC6は、このような化合物の情報の海から本当に重要なものを厳選し、現代の化学者に適切な物性データ、化学構造図および書誌情報を提供できるように編集されています。

DOC6はCD-ROMでもご提供しています。ご自分のパソコンやネットワークからCD-ROMに収録されている有機化合物を様々な角度から検索することもできます。化学用語やCAS化合物登録番号、化学式、融点などの物性データからの検索はもちろんのこと、部分構造検索することもできます。CD-ROMですので利用料金を心配せずに思う存分検索できます。また、データが電子的に収録されていますので必要な箇所だけをプリントアウトしたり、ワープロに取り込んだりすることができます。データは年2回更新いたします。

新版の主な特長

- ▶ 全9巻: 本文部分6巻、索引部分3巻 (DOC名、分子式、CAS登録番号など)、全11,000頁。
- ▶ 170,000超の基本化合物・試薬・溶剤・天然物などの広く使用されている重要な化合物、62,000項目を収録(第5版に比べ、エントリ化合物の80%が新しくなり、30,000化合物、14,000項目の増)。

●BOOK

年間補遺込みの継続注文番号 MSN:94S0765

本体全9巻のみの単品注文番号 MBN:9445311

出版記念特価 ¥598,000

●CD-ROM 学術機関特価 ¥519,700 学術機関以外 ¥661,500

(※CD-ROM版は指定代理店です)

(Chapman & Hall, GBR)

※価格はいずれも税別



日本総代理店

【本社・日本橋店】〒103 東京都中央区日本橋 2-3-10 ☎(03) 3272-7211 振替: 00170-5-5

支店・営業所: 東京(お茶の水・丸の内・内幸町・浜松町・アークヒルズ・渋谷・錦糸町・北千住・柏・取手・土浦・船橋)・千葉・八王子・大宮・新潟/札幌・仙台・盛岡・筑波・水戸・横浜・静岡・浜松・名古屋・津・岐阜・金沢・京都・大阪・神戸・姫路・岡山・松山・広島・福岡・長崎・鹿児島・沖縄/ニューヨーク・シカゴ・ロンドン・シンガポール

1996年1月

通巻第344号

洋書輸入協会

編集者 神田 俊二

〒103 東京都中央区日本橋1-21-4 千代田会館5階20号室

☎(03) 3271-6901 FAX: (03) 3271-6920

印刷所=藤本綜合印刷株式会社